未来を生き抜く子どもたち⑤

授業研究会、そしてその後

2018．06．19
No.19
校長　渡邉　幸二

授業研が終わり、４月からの超多忙期がようやくひと段落したところでしょうか。といっても、これから自然教室が続き息つく暇もない先生方も多いですね。子どもと向き合う時間もない中であっても、本当にていねいに仕事を進めていただいている先生方に感謝いたします。

E先生は、いつまでも素敵なチャレンジャーです。

さて、これからみなさんにご苦労いただいた学校経営概要に則った実践を進めていただいたり、先日実施していただいた人事評価面談の自己目標に向けた取り組みをしていただいたり、はたまた授業研をふり返ってのレポートを書いたりしていただくわけですが、その取り組みについての評価をする際のお願いがあります。

よく評価の一つとして**「成果と課題」**としてその実践をふり返ることが多いと思います。その際「成果」というと、イコール「良かったこと」「うまく行ったこと」というイメージで捉えてしまいがちです。しかし、教育の現場において、自分の授業や実践がうまく行ったとか、とても良かったなどということはそうあるものではありません。人事評価シートを見ても、先生方の自己評価はかなり厳し目のものが多いと思います。それは「教育」という性質上、また「子どもの成長」という目にはなかなか見えにくいものを評価するという性格上そうなりやすいのではないかと思うのです。

先日の地震の避難訓練はこれまでにない形で実践しました。ある意味チャレンジです。結果は「避難完了まで１５分かかる」という事実が判明しました。それはうまく行ったのか行かなかったのかはわかりません。しかしそういう結果がわかったことが大きな成果だと思っています。おそらく授業だってさまざまな教育活動だって、ある意味チャレンジです。やってみて**「うまく行く」という結果や「うまくは行かない」という事実が判明することが大きな成果**だと考えます。

うまく行くことだけにあまり注目し過ぎると、プロセスの重要性が忘れられることがあります。たとえばよくあるのが学習発表会です。見栄えを良くしたいという思いが強過ぎれば、きっとものすごく時間をかけるか、短時間でやるとすれば子ども抜きになってしまうなど、本当は一番大切なプロセスがすっぽりと抜けてしまう危険があるのです。もちろん、子どもの成長する姿をねらわずに活動することに意味はありません。ただねらったにもかかわらずうまく行かないことも多く、実はそれも重要な成果だということです。うまく行かなかったことを糧に、**改善･解決志向で再チャレンジしていくところに私たちの成長があります**。柔軟な思考（脳）で、これからも成長し続ける教師（人）でありたいと思います。

リーディングスキルテスト（ＲＳＴ）

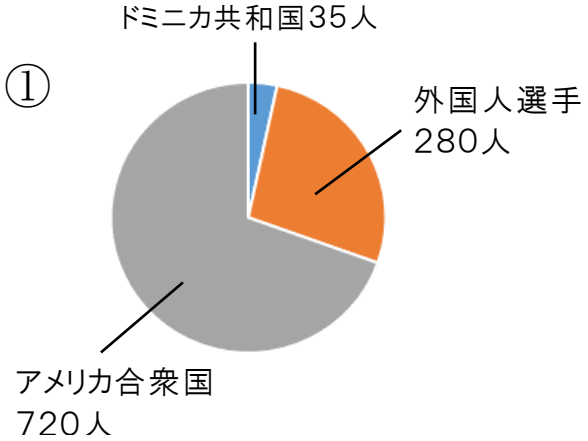
校長室だよりNo.１５の続きになります。

最近発売された「東洋経済」や「プレジデント」などの雑誌でもＡＩのことが取り上げられ、新井紀子氏らが開発したＲＳＴが紹介されています。その中で、**「子どもたちが教科書を読めていない」**という事実がわかってきた有名な問題があります。みなさんもチャレンジしてみてください。小学生でも解ける問題です。

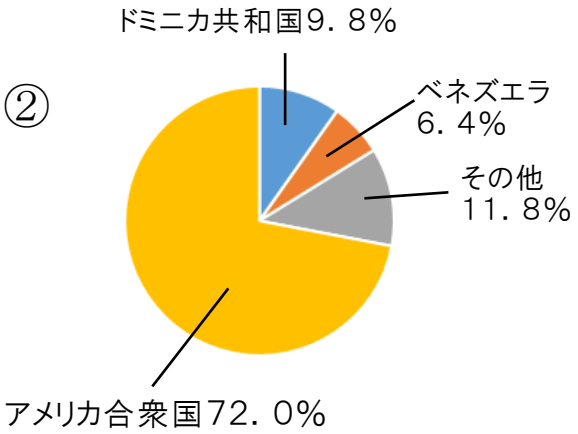
下記の文を読み、メジャーリーグ選手の出身国の内訳を表す図として適当なものをすべて選びなさい。

メジャーリーグ選手のうち２８％はアメリカ合衆国以外の出身の選手であるが、その出身国を見ると、ドミニカ共和国が最も多くおよそ３５％である。

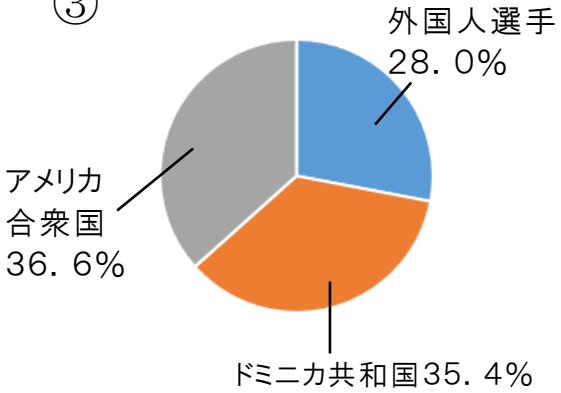
①



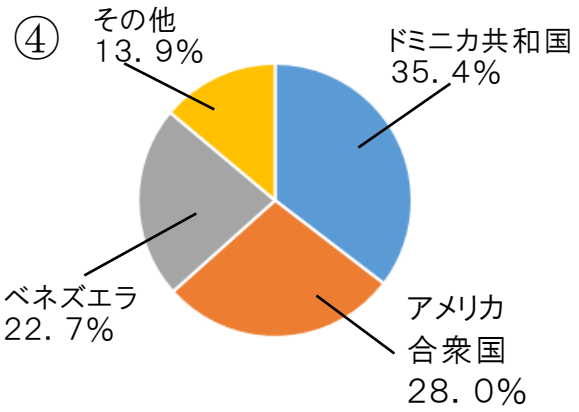
②



③



④



どうでしょうか。答えは出ましたか？

ちなみに、中学生の正答率は１２％、高校生２８％です。東大生ですら５２％ですから、半分の東大生は正解にたどり着けなかったということです。この問題は４択ですので、適当に、たとえばサイコロを振って回答してもおよそ２５％の確率で正解になります。ということは高校生の読解力はサイコロ並み、中学生はサイコロ以下ということになります。衝撃的な数字です。

正解は②ですが、どの誤答が多かったかというと④なんだそうです。

では、なぜ④が多いかということを新井氏は「以外の」や「のうち」という**言葉を読み飛ばしている**、あるいは**使い方がわからない**のではないかと分析されています。

他にも衝撃的な例題が載っていますので、今後も紹介していきます。